第五部会

「水子供養」と韓国女性――落胎兒薦度専門寺院の信者層――

渕上　恭子

日本特有の信仰と考えられていた「水子供養」が、韓国の仏教に取り入れられたのは、同国で妊娠中絶がにわかに増え始めた一九八〇年代中盤のことであった。一九九〇年代以降、妊娠中絶が増加の一途をたどる中で、「水子靈駕薦度」となって韓国全土に広がった「水子供養」は、これまで嬰児や流産児が供養の対象とされていなかった韓国における、新種の死者儀礼となって今日に及んでいる。本報告で、二〇〇〇年代以降の韓国において、「水子供養」の専門寺院として台頭してきた大韓佛教曹溪宗G寺を取り上げ、その布教戦略を支える女性信者層のニーズについて考察しながら、今日の韓国でG寺が盛況する要因を探っていきたい（韓国仏教で「死者供養」は「靈駕（死者）薦度」と称されている。以下、韓国仏教の「水子供養」一般を「水子靈駕薦度」、G寺のそれを「落胎兒薦度」とする）。

住職のC比丘尼僧侶がソウル市廣津区中谷洞の雑居ビルの中に落胎（中絶）兒の薦度を専門に手掛けるG寺を開いたのは、「水子靈駕薦度」が韓国に急速に広まっていた一九九三年のことであった。当時のG寺は、C僧侶と数名の古参信徒等が毎月陰暦一八日の地蔵齋日に、落胎・流産した「胎中アギ（赤子）靈駕」のための祈禱を行う小さな布教堂であった。

一九九八年にG寺がソウル近郊の抱川郡に移転し、「ママとパパの懺悔祈禱道場」を開設して、落胎兒の合同薦度法会を奉行するようになると、その模様がメディアで取り上げられて、一躍仏教界の注目を集めるようになった。それ以来、G寺では毎年三回（三月、六月、九月）の「落胎兒薦度齋」が奉行されており、近年の薦度齋の年間参加者数は千人を超えている。二〇〇〇年代の「水子靈駕薦度」の定着期に入って更なる教勢拡大を遂げ、二〇一一年にソウルに隣接する南楊州市に移転したG寺は、五百体を超える「アギ童子像」（水子地蔵）を祀る「慈母庵」を建立したのに続いて「落胎懺悔公園」を造成する等、活発な布教活動を展開しながら、韓国最大の「落胎兒薦度」専門寺院となって今日に至っている。

G寺の「落胎兒薦度」は、「祖上（祖先）靈駕薦度」を重視する既存の仏教寺院の「水子靈駕薦度」と差別化された、落胎女性のプライバシーを保護する、都市家族の行事として推進されている。こうした「落胎兒薦度」は、①他の男性との間の「水子靈駕」を薦度する女性、②反復中絶をし、難しい年頃の子供をめぐる問題を抱えた女性、③そうした嫁達から「水子靈駕薦度」への介入を拒まれてG寺を訪れ、自身の「水子靈駕」の薦度をする姑世代の高齢女性といった信者層によって担われている。G寺の「落胎兒薦度」が盛行する理由として、ソウルを中心とした今日の韓国の都市部における核家族化の進行と、それに伴う落胎女性等のプライバシー意識の高まり、落胎兒を有する家庭内での世代間対立の顕在化が挙げられ、そのような韓国社会の変化にG寺が巧みに対応していると考えられる。今日の韓国における落胎女性達の意識の変化に、「祖上靈駕薦度」を重んじる既存の寺院が対処できないでいる中で、妊娠中絶した女性信者等のニーズをG寺がうまくすくい上げて、「落胎兒薦度」に反映させているといえよう。韓国仏教界の常識にとらわれない、卓越した寺院経営戦略を掲げて、落胎女性等を取り巻く韓国社会の変化に機敏に対応するG寺の「落胎兒薦度」は、「祖上靈駕薦度」にとらわれる既存の仏教寺院の死者供養がいかなる問題を抱えており、韓国仏教の「水子靈駕薦度」に何が求められているかを示唆しているようである。

「東義大学校事件」をめぐる死者のナショナルな地位について

田中　悟

「東義大事件」とは、「一九八九年五月三日、釜山東義大学校に監禁された戦闘警察巡警を救出する過程で籠城学生たちの火炎瓶投擲によって警察官および戦闘警察巡警七名が死亡し、一〇名が負傷した事件をいう」（「東義大事件犠牲者の名誉回復および補償に関する法律」第二条第一項）。本報告では、韓国社会におけるこの事件の位置づけを確認し、金大中・盧武鉉政権期と李明博・朴槿恵政権期とで大きく変わった政治情勢に翻弄された関係者に注目することで、この事件をめぐって残された課題についての考察を試みる。

事件が発生した一九八九年は、盧泰愚政権の時代である。一九八七年の民主化を経たとは言え、反政府運動の熱気はいまだ冷めやらず、激しい労働運動・学生運動にともなって労働者・学生と警察との衝突（「火炎瓶―催涙弾対決」）が全国で繰り返されるという、不安定な政治社会情勢が継続していた。そのよ